

自己開示の性差，開示対象者による相違および 健康なパーソナリティとの関係

松原詩緒*・齊藤 勇**

Gender Difference in Self-Disclosure, the Contents Difference in Self-Disclosure
Depending on the Subject's Relationship with Target Persons, and
Relationship between Self-Disclosure and Healthy Personality

Shio MATSUBARA* and Isamu SAITO**

The purpose of this study was to examine the gender difference in self-disclosure measured by Enomoto Self-Disclosure Questionnaire (ESDQ), the contents difference in self-disclosure depending on the subject's relationship with target persons, and relationship between self-disclosure and healthy personality measured by questionnaire modified General Health Questionnaire (GHQ) among 134 university students. In this study, each subject was randomly given 3 out of 5 target persons (father, mother, close same sex friend, close opposite sex friend and casual friend) to respond on ESDQ. Results of the ESDQ were analyzed for each of 4 factors found by Matsubara (2008). As a result 10 factors were identified. Females disclosed more than males for 3 factors while males disclosed more for 2 factors. Analysis of contents difference indicated that subjects disclosed more to their friends than to their parents. In particular, they disclosed more to their close same sex friend than to their father. Positive correlations were found between self-disclosure and depressive tendency and impede to social activities among males while negative correlations were found between self-disclosure and somatic symptom and anxiety among females.

key words: self-disclosure, healthy personality, gender differences

問 題

本研究は自己開示の性差，開示対象者による内容の相違，および健康なパーソナリティとの関係を実証的に研究することを目的とした。

「自己開示 (Self-Disclosure)」の心理学的研究は，Jourard, S. M. によって始められた。彼によると自己開示とは，「自分をあらわにする行為であり，他人

が知覚するように自身を示す行為である」(Jourard, 1971 岡堂訳 1974)。自己開示の内容の研究についてみると，Jourard & Lasakow (1958) は実証的調査のため JSDQ (Jourard Self-Disclosure Questionnaire) を作成している。日本においては，内容の研究¹⁾では榎本 (1987) が ESDQ (Enomoto Self-Disclosure Questionnaire) を作成し，飯長 (1978) が ISDQ (Iinaga's Self-Disclosure Ques-

* 立正大学大学院心理学研究科

Department of Psychology, Graduate School at Rissho University

** 立正大学心理学部

Department of Psychology, Rissho University: 4-2-6 Osaki, Shinagawa-ku, Tokyo 141-8602, Japan

¹⁾ 自己開示の質問紙には，ほかに，単純に自己開示の有無について聞いたもの (丸山・今川，2002; 福岡，2006) や自己開示の適切・不適切さを基準にしたもの (熊野，2002; 森脇・坂本・丹野，2002a, 2002b) などがある。

tionnaire)を作成している。本研究では自己開示の内容について、日本の研究において多く用いられている ESDQ の 45 項目版，ESDQ-45 をベースに用いた。

さて，ESDQ の尺度だが，榎本(1987)は自己開示を James (1890) が分類した“物質的自己”“社会的自己”“精神的自己”の 3 構成を軸とし，そこから梶田(1980)，北村(1962)，van den Verg (1963 早坂訳 1980) らを参考に，“身体的自己”“血縁的自己”“実存的自己”を加え大きく 6 つに分類した。さらに，“精神的自己”を“知的側面”“情緒的側面”“志向的側面”の 3 つに，“身体的自己”を“外見的側面”“体質・機能的側面”“性的側面”の 3 つに，“社会的自己”を“私的人間関係の側面”“公的人間関係の側面”の 2 つに分け，計 11 側面で構成した。その後 1987 年に，“私的人間関係”をさらに“同性関係”“異性関係”に分け，浅い開示内容として“趣味”“意見”“うわさ話”の 3 側面を加え，合わせて 15 側面での構成とした。それらの側面に対し 3 項目ずつ質問項目を作成したのが ESDQ-45 である。実証的研究としては，作成された質問紙を用いて女子大学生を対象に調査し，側面ごとに内部相関をとっている。しかし，質問項目全体を通した因子分析は行われていない。そこで松原(2008)は，男性も含め，男女を対象に調査を行い，全体の因子分析を行った。その結果 ESDQ-45 から 4 因子が抽出されたが，本研究では榎本の 15 側面との照合を考慮し，この結果をさらに詳細に因子分析し，自己開示の内容の構造を再検討することを目的のひとつとした。

また，Jourard (1971) は研究初期に自己開示の性差について，男性よりも女性の開示が多いと指摘した。その理由のひとつとして，性役割が挙げられている。Derlega, Metts, Petronio, & Margulis (1993 齊藤監訳 1999) は，男性は女性的であってはならないという文化的期待により，自己開示が抑制されていると指摘した。男性は自分の弱さや傷つきやすい点，確信のなさ，不安などを開示するのは適切でないと考え，それにより自己開示を抑えているとした。実際の調査でも，女性の自己開示が多かった結果(榎本，1997；高木，2007；Ward, Doherty, & Moran, 2007) が数多くみられている。性差がみられなかった結果(和田，1995)もあるが，本研究では文化的期待などから，女性のほうが男性と比較し

開示量が多いと仮説をたて，検討を行った。

ところで，自己開示は開示対象者によって内容や量に変化すると考えられる。Burnard & Morrison (1992) は，イギリスの女子大学生を対象に JEDQ の 25 項目を用いて調査を行った。母親・父親・同性の友人・異性の友人の 4 対象者に対する自己開示量についてたずねた。対象者が他の誰かに，開示者のことを話せるくらいに知っていると思うのであれば 1，そうでなければ 0 の，2 段階評価であった。その結果，同性の友人への開示が最も多く，父親に対しての開示が最も少なかった。榎本(1982, 1987) の調査では，11 側面で構成された ESDQ を用いて，父親・母親・最も親しい同性の友人・最も親しい異性の友人の 4 対象者への自己開示量を比較した。評価は，全く話したことがないあるいは偽ってきた場合には 0，一般的なことだけ話している場合には 1，十分詳しく話している場合には 2 の，3 段階であった。調査の結果，一般的なこと以上に話されているのは，親しい同性の友人だけであった。そして最も少なく開示された対象者は，父親であった。しかしいずれの研究も，平均点を算出したのみで，統計的に有意であるかの検定は行われていない。本研究では開示対象者により開示内容や自己開示量に違いがあると考え，開示対象者を父親・母親・最も親しい同性の友人・最も親しい異性の友人・一般的な友人として 15 側面の ESDQ を用いて検討した。

さて，Jourard, S. M. (1971, 1980) と Jourard, L. (1994) は，自己開示は健康なパーソナリティーに関係していると指摘した。これに関しては，近年に至るまで，多くの検討がなされている。研究初期においては，自己開示と健康なパーソナリティーの関係は 1 次的(直線的)であると考えられていた。Mayo (1968) は神経症患者と神経症の徴候のある正常者，徴候のない正常者の 3 群に分け，神経症傾向と自己開示の量との相関を測定した。その結果，負の相関がみられた。Pennebaker, Keicolt-Glaser, & Glaser (1988) は定めた期間に毎日短いエッセイを書かせ，その中にトラウマ的な経験に関する内容が含まれていたかを調査した。その結果，トラウマ的な経験に関して書いていた人のほうが，そうでない人より健康管理センターに訪れる回数が少なかった。Pederson & Higbee (1969) は，自己開示と Pederson の作成した Pederson Personality Inventory

を用いて実験を行ったところ、女性においてN尺度(神経症傾向)などが自己開示の量と負の相関を示した。しかしCozby (1973)は自己開示と健康なパーソナリティが直線的な関係であることに疑問を抱き、逆U字型の曲線的(2次的)関係があるのではないかと考えた。近年になり、和田(1995)が自己開示量と自己開示欲求、心理的幸福感の関係を調査したところ、自己開示量と心理的幸福感の間には逆U字型の曲線関係がみられた。

以上のようにこれまでの研究では、自己開示と健康なパーソナリティには直線的あるいは曲線的な関係がみられている。しかし、研究全体としては、曲線よりも直線的な関係を仮定したものが多い。最近でも、例えば自己開示から直接あるいは受容という要因を経て、ネガティブ感情の低減がみられた結果(丸山・今川, 2001)や、自己開示により情緒的ストレス反応と認知・行動的ストレス反応の低減がみられた結果(丸山・今川, 2002)、自己開示と触れ合い恐怖に中程度の負の相関がみられた結果(東・榎本, 2006)、ソーシャル・スキルを伴った自己開示から学級満足度へ正のパスがみられた結果(小野寺・河村, 2007)、同性や異性の友人への自己開示と孤独感に中程度の負の相関がみられた結果(高木, 2007)などがある。これらの研究を元に、本研究でも、自己開示と健康なパーソナリティは正の相関があると仮説をたて、実証的に検討することとした。

方 法

調査対象 首都圏大学生 134 名であった。そのうち男性は 61 名、女性は 73 名であった。平均年齢 21.4 歳($SD=6.4$)であった。

調査日 2007 年 1 月

手続き 大学生に対し、質問紙による調査を行った。授業時に配布、回答を依頼した。

質問紙 自己開示の内容と量、健康なパーソナリティに関する質問紙を用いた。

1. 自己開示

ESDQ-45(榎本, 1987)を用いた。ESDQ-45は15側面45項目からなる。回答は「1: 全く話したことがない」から「5: 十分に話してきた」の5件法で求めた。開示対象者は父親・母親・最も親しい同性

の友人・最も親しい異性の友人・一般的な友人であった。なお、回答量の適切さを考慮して、1人の実験参加者には5人の開示対象者のうち、指定した3人についての回答を求めた。

2. 健康なパーソナリティ

健康なパーソナリティの指標として、本研究ではGHQ(中川・大坊, 1996)を元に、より明確にスケール化した回答形式の質問紙を作成した。例えば、GHQでは「元気がなく疲れを感じたことは(全くなかった・あまりなかった・あった・たびたびあった)」という4件法で文章を完成させる形式だったが、これを「元気がなく疲れを感じたことは全くなかった」と文章を提示し、「1: 全くそうでない」から「4: そうである」の4件法で回答を求めた。

結 果

ESDQ-45の因子分析 松原(2008)の結果では、『恋愛・友人』『趣味・関心ごと』『身体』『家族』の4因子構造が抽出された。これは、榎本の作成した15側面とは異なる結果であった。しかし各因子を検討すると多側面を含まれているようにみえた。本研究では、さらに詳細な因子構造を検討するため、抽出された各因子内で、因子分析(主因子法・Promax回転)を行った。なお、松原(2008)では性別不明者を含み分析を行っていた。本研究では性差を検討するため、性別が不明であった1名を削除し、再度因子分析を行った。その結果、松原(2008)と全く同じ4因子が抽出された。Chronbachの α 係数を算出したところ、それぞれ.95, .92, .89, .84であった。

1. 第1因子『恋愛・友人』

松原(2008)の因子分析で抽出された4因子のうち、第1因子である『恋愛・友人』の質問項目に対象を絞って、第1因子のみの因子分析を行った。その結果、3因子が抽出された。なお、質問項目「性器に対する関心や悩み事」は因子負荷量が.40に満たなかったため、削除した。因子構造は、おおむねESDQ-45の以下の3側面と一致した(Table 1)。第1因子に含まれた質問項目のうち、因子負荷が高かったのは、ESDQ-45の“同性関係”の側面であった。そのため名前を採用し、因子名を『同性関係』とした。第2因子に含まれた質問は、すべてESDQ-45“性的側面”の項目であった。そのため因子名を

Table 1 第1因子『恋愛・友人』の因子分析結果

質問項目	ESDQ-45 の側面	同性関係	性的側面	異性関係	α
07 友人に対する好き・嫌い	[同性関係 (私的人間関係の側面・社会的自己)]	.81	-.04	.07	.90
22 友人関係における悩み事	[同性関係 (私的人間関係の側面・社会的自己)]	.75	-.06	.19	
37 友人関係に求めること	[同性関係 (私的人間関係の側面・社会的自己)]	.74	.31	-.20	
15 友達のうわさ話	[(うわさ話)]	.65	-.10	.28	
40 服装の趣味	[(物質的自己)]	.50	.04	.18	
36 性器に対する関心や悩み事	[性的側面 (身体的自己)]	.04	.79	-.11	.85
21 性に対する関心や悩み事	[性的側面 (身体的自己)]	-.03	.71	.26	
06 性的衝動を感じた経験	[性的側面 (身体的自己)]	-.03	.58	.32	
08 過去の恋愛経験	[異性関係 (私的人間関係の側面・社会的自己)]	.15	.05	.77	.93
23 異性関係における悩み事	[異性関係 (私的人間関係の側面・社会的自己)]	.23	.03	.70	
38 好きな異性に対する気持	[異性関係 (私的人間関係の側面・社会的自己)]	.17	.16	.60	
因子相関行列			.63	.77	
				.72	

Table 2 第2因子『趣味・関心事』の因子分析結果

質問項目	ESDQ-45 の側面	パーソナリティ	将来展望	意見	α
18 抛りどころとしている価値観	[志向的側面 (精神的自己)]	.82	-.17	.09	.87
12 生きがいや充実感に関すること	[(実存的自己)]	.76	.00	.06	
13 休日の過ごし方	[(趣味)]	.73	.00	-.05	
33 目標としている生き方	[志向的側面 (精神的自己)]	.64	.18	-.07	
43 趣味としていること	[(趣味)]	.60	.14	.06	
39 人生における仕事の位置づけ	[公的役割関係の側面 (社会的自己)]	.39	.24	.10	
10 こづかいの使い道	[(物質的自己)]	.38	.21	.08	.82
24 興味を持っている業種や職種	[公的役割関係の側面 (社会的自己)]	-.16	1.02	.03	
03 現在持っている目標	[志向的側面 (精神的自己)]	.19	.61	-.08	
16 興味を持って勉強していること	[知的側面 (精神的自己)]	.33	.45	.06	.76
14 文学や芸術に関する意見	[(意見)]	.00	-.07	.77	
44 社会に対する不平・不満	[(意見)]	.03	.01	.66	
31 知的な関心事	[知的側面 (精神的自己)]	.06	.12	.63	.76
因子相関行列			.72	.73	
			.64		

『性的側面』とした。第3因子に含まれた質問はすべて ESDQ-45 の“異性関係”の側面であった。そのため因子名を『異性関係』とした。Chronbach の α 係数を算出したところ，それぞれ，.90，.85，.93 であった。

2. 第2因子『趣味・関心ごと』

第2因子についての因子分析を行った。質問項目「知的能力に対する自信あるいは不安」は，いずれの因子においても因子負荷量が.30 に満たなかったため，削除した。再度因子分析を行った結果，3因子が抽出された。因子は，ESDQ-45 のいくつかの側面が混在した構造となった (Table 2)。そのため新たな因子名を検討した。第1因子は「抛りどころとし

ている価値観」や「生きがいや充実感に関すること」，「休日の過ごし方」などの個人の個性や人柄に関する内容で構成されていたことから『パーソナリティ』とした。第2因子は「興味を持っている業種や職種」や「現在持っている目標」など，大学生の近い未来に関する内容で構成されていたことから『将来展望』とした。第3因子は ESDQ-45 の“意見”という側面が多く含まれていたことから，それを採用し『意見』とした。それぞれの α 係数は .87，.82，.76 であった。

3. 第3因子『身体』

2因子が抽出された (Table 3)。第1因子は“体質・機能的側面 (身体的自己)”のほかにもいくつか

Table 3 第3因子『身体』の因子分析結果

質問項目	ESDQ-45 の側面	機能的側面	外見的側面	α
05 運動神経	[体質・機能的側面 (身体的自己)]	.74	.02	.85
01 知的能力に対する自信あるいは不安	[知的側面 (精神的自己)]	.73	-.08	
04 容姿・容貌の長所や短所	[外見的側面 (身体的自己)]	.69	.16	
20 体質的な問題	[体質・機能的側面 (身体的自己)]	.44	.34	
35 身体健康上の悩み事	[体質・機能的側面 (身体的自己)]	.41	.39	
34 外見に関する悩み事	[外見的側面 (身体的自己)]	-.11	1.02	.81
19 外見的魅力を高めるために努力していること	[外見的側面 (身体的自己)]	.10	.64	
因子相関行列			.75	

Table 4 第4因子『家族』の因子分析結果

質問項目	ESDQ-45 の側面	血縁的自己	実存的自己	α
11 親の長所や欠点	[(血縁的自己)]	.91	-.07	.83
41 親に対する不満や要望	[(血縁的自己)]	.79	.02	
26 家族に関する心配事	[(血縁的自己)]	.59	.21	
27 人生における虚しさや不安	[(実存的自己)]	-.06	.96	.78
42 孤独感や疎外感	[(実存的自己)]	.12	.63	
因子相関行列			.59	

の質問項目が含まれていた。能力的な内容で構成されていたことから ESDQ-45 の側面名を参考に、『機能的側面』とした。第2因子は ESDQ-45 の“外見的側面 (身体的自己)”と合致した質問項目であったため、そのまま因子名を『外見的側面』とした。それぞれの α 係数は、.85, .81 であった。

4. 第4因子『家族』

2因子を抽出した (Table 4)。因子構造が ESDQ-45 の“血縁的自己”“実存的自己”と全く同じだったことから、そのまま第1因子を『血縁的自己』、第2因子を『実存的自己』とした。 α 係数はそれぞれ .83, .78 であった。

自己開示における性差 因子分析によって抽出された下位因子における、自己開示量の性差について検討した。なお、下位因子の得点は、因子に該当した質問項目の平均値を用いた。 t 検定の結果、第1因子『恋愛・友人』では、下位因子である『同性関係』と『性的側面』の開示量に差がみられた ($t_{(400)} = 2.09, p < .05$; $t_{(400)} = 2.60, p < .01$) (Table 5)。『同性関係』については女性のほうが、『性的側面』については男性のほうが高い値を示した。第2因子『趣味・関心事』の下位因子である『意見』は、男性のほうが高い値を示した ($t_{(400)} = 2.21, p < .05$)。第3因子『身体』の下位因子である『外見的自己』は女性のほ

Table 5 自己開示における性差

		男	女
	N	183	219
恋愛・友人	同性関係	2.77 (1.211)	3.03* (1.201)
	性的側面	2.20 (1.151)	1.91** (1.101)
	異性関係	2.55 (1.351)	2.71 (1.511)
趣味・関心事	パーソナリティ	3.01 (1.001)	2.85 (.931)
	将来展望	3.26 (1.171)	3.14 (1.071)
	意見	2.97 (1.121)	2.73* (1.061)
身体	機能的側面	2.90 (1.021)	2.96 (1.081)
	外見的側面	2.43 (1.171)	2.72* (1.271)
家族	血縁的自己	2.49 (1.141)	2.82** (1.191)
	実存的自己	2.31 (1.201)	2.26 (1.221)

※ * $p < .05$, ** $p < .01$

※ 数字は平均値, () は標準偏差

Table 6 自己開示の開示対象による差

		男							女						
		開示対象(I)						分散分析	開示対象(I)						分散分析
		母	父	親同友	親異友	友			母	父	親同友	親異友	友		
		N	34	36	34	39	40		47	46	44	41	41		
恋愛・友人	同性関係	Me	2.05	1.64	3.62	3.42	3.06	***	2.98	1.54	4.01	3.27	3.43	***	
		SD	(.85)	(.72)	(1.00)	(.99)	(1.07)		(.90)	(.72)	(.76)	(1.06)	(.89)		
	開示対象 (J)	母	.41 n.s.	-.41 n.s.	1.57 ***	1.36 ***	1.01 ***		1.44 ***	-.14 ***	1.03 ***	.29 n.s.	.45 n.s.		
		父	-.157 ***	-.198 ***	1.98 ***	1.78 ***	1.42 ***		-.103 ***	-.247 ***	2.47 ***	1.73 **	1.90 ***		
		親同友	-.136 ***	-.178 ***	.21 n.s.	-.21 n.s.	-.56 n.s.		-.29 n.s.	-.173 ***	.74 **	-.74 **	-.58 *		
		親異友	-.101 ***	-.142 ***	.56 n.s.	.36 n.s.	-.36 n.s.		-.45 n.s.	-.190 ***	.58 *	-.16 n.s.	.16 n.s.		
	性的側面	Me	1.35	1.42	3.05	2.41	2.70	***	1.43	1.05	2.81	2.11	2.24	***	
		SD	(.57)	(.61)	(1.11)	(1.10)	(1.10)		(.49)	(.19)	(1.22)	(1.11)	(1.15)		
	開示対象 (J)	母	.06 n.s.	.170 ***	1.06 ***	1.35 ***	.81 ***		-.38 n.s.	-.38 n.s.	1.38 ***	.67 **	.81 ***		
		父	-.06 n.s.	-.163 ***	.99 ***	1.28 ***	.201 ***		-.138 ***	-.176 ***	1.76 ***	1.05 ***	1.19 ***		
		親同友	-.106 ***	-.99 ***	.64 *	-.64 *	-.35 n.s.		-.67 **	-.105 ***	.70 **	-.70 **	-.57 *		
		親異友	-.135 ***	-.128 ***	.35 n.s.	-.29 n.s.	.29 n.s.		-.81 ***	-.119 ***	.57 *	-.14 n.s.	.14 n.s.		
異性関係	Me	1.45	1.33	3.53	3.40	2.90	***	1.91	1.10	4.23	3.11	3.37	***		
	SD	(.62)	(.56)	(1.20)	(1.16)	(1.15)		(.82)	(.25)	(1.02)	(1.37)	(1.28)			
パーソナリティー	開示対象 (J)	母	.12 n.s.	-.12 n.s.	2.08 ***	1.95 ***	1.45 ***		.81 **	-.81 **	2.32 ***	1.20 ***	1.46 ***		
		父	-.208 ***	-.220 ***	2.20 ***	2.07 ***	1.57 ***		-.232 ***	-.313 ***	3.13 ***	2.01 ***	2.27 ***		
		親同友	-.195 ***	-.207 ***	.13 n.s.	-.13 n.s.	-.63 n.s.		-.120 ***	-.201 ***	1.12 ***	-.12 ***	-.86 **		
		親異友	-.145 ***	-.157 ***	.63 n.s.	.50 n.s.	-.50 n.s.		-.146 ***	-.227 ***	.86 **	-.26 n.s.	.26 n.s.		
	将来展望	Me	2.72	2.41	3.50	3.39	2.99	***	2.88	2.14	3.33	2.99	2.96	***	
		SD	(.90)	(.93)	(.89)	(.98)	(.91)		(.83)	(.81)	(.80)	(.99)	(.79)		
	開示対象 (J)	母	.31 n.s.	-.31 n.s.	1.08 ***	.98 ***	.57 n.s.		.74 ***	-.74 ***	1.20 ***	.85 ***	.83 ***		
		父	-.77 **	-.108 ***	1.08 ***	.98 ***	.51 n.s.		-.46 n.s.	-.120 ***	1.20 ***	.85 ***	-.37 n.s.		
		親同友	-.67 *	-.98 ***	.10 n.s.	-.10 n.s.	-.41 n.s.		-.11 n.s.	-.85 ***	.34 n.s.	-.34 n.s.	-.03 n.s.		
		親異友	-.26 n.s.	-.57 n.s.	.51 n.s.	.41 n.s.	-.41 n.s.		-.08 n.s.	-.83 ***	.37 n.s.	.03 n.s.	-.03 n.s.		
	意見	Me	3.29	2.87	3.59	3.45	3.10	n.s.	3.30	2.57	3.55	3.20	3.09	***	
		SD	(1.15)	(1.17)	(1.06)	(1.13)	(1.22)		(1.09)	(1.09)	(.90)	(1.06)	(.95)		
趣味・関心ごと	開示対象 (J)	母	.42 n.s.	-.42 n.s.	.29 n.s.	.16 n.s.	-.19 n.s.		.74 **	-.74 **	.25 n.s.	-.10 n.s.	-.22 n.s.		
		父	-.29 n.s.	-.72 n.s.	.72 n.s.	.58 n.s.	.23 n.s.		-.25 n.s.	-.99 ***	.99 ***	.64 *	.52 n.s.		
		親同友	-.16 n.s.	-.58 n.s.	.14 n.s.	-.14 n.s.	-.49 n.s.		.10 n.s.	-.64 *	.35 n.s.	-.35 n.s.	-.46 n.s.		
		親異友	.19 n.s.	-.23 n.s.	.49 n.s.	.35 n.s.	-.35 n.s.		.22 n.s.	-.52 n.s.	.46 n.s.	.11 n.s.	-.11 n.s.		
	意見	Me	2.89	2.63	3.29	3.15	2.88	n.s.	2.88	2.39	3.05	2.57	2.74	*	
		SD	(1.00)	(1.15)	(1.03)	(1.16)	(1.16)		(.97)	(1.18)	(.95)	(1.13)	(.95)		
	開示対象 (J)	母	.26 n.s.	-.26 n.s.	.40 n.s.	.25 n.s.	-.01 n.s.		.49 n.s.	-.49 n.s.	.17 n.s.	-.31 n.s.	-.14 n.s.		
		父	-.40 n.s.	-.66 n.s.	.66 n.s.	.52 n.s.	.25 n.s.		-.17 n.s.	-.66 *	.66 *	.18 n.s.	.35 n.s.		
		親同友	-.25 n.s.	-.52 n.s.	.15 n.s.	-.15 n.s.	-.41 n.s.		.31 n.s.	-.18 n.s.	.48 n.s.	-.48 n.s.	-.31 n.s.		
		親異友	.01 n.s.	-.25 n.s.	.41 n.s.	.26 n.s.	-.26 n.s.		.14 n.s.	-.35 n.s.	.31 n.s.	-.17 n.s.	.17 n.s.		
	機能的自己	Me	2.91	2.51	3.29	3.11	2.71	**	3.51	2.15	3.44	2.86	2.80	***	
		SD	(.94)	(1.09)	(.95)	(1.03)	(.98)		(.92)	(.98)	(.88)	(1.08)	(.94)		
身体	開示対象 (J)	母	.40 n.s.	-.40 n.s.	.38 n.s.	.20 n.s.	-.21 n.s.		1.37 ***	-.137 ***	1.29 ***	-.65 *	-.71 **		
		父	-.38 n.s.	-.78 *	.78 *	.60 n.s.	.19 n.s.		.08 n.s.	-.129 ***	1.29 ***	.72 **	.65 *		
		親同友	-.20 n.s.	-.60 n.s.	.18 n.s.	-.18 n.s.	-.58 n.s.		.65 *	-.72 **	.57 n.s.	-.57 n.s.	-.64 *		
		親異友	.21 n.s.	-.19 n.s.	.58 n.s.	.40 n.s.	-.40 n.s.		.71 **	-.65 *	.64 *	.06 n.s.	-.06 n.s.		
	外見的自己	Me	2.12	1.75	2.82	2.90	2.54	***	3.04	1.52	3.45	2.72	2.91	***	
		SD	(1.04)	(.85)	(1.25)	(1.21)	(1.08)		(1.15)	(.74)	(1.16)	(1.24)	(1.11)		
	開示対象 (J)	母	.37 n.s.	-.37 n.s.	.71 n.s.	.78 *	.42 n.s.		1.52 ***	-.152 ***	.41 n.s.	-.32 n.s.	-.13 n.s.		
		父	-.71 n.s.	-.107 ***	1.07 ***	1.15 ***	.79 *		-.41 n.s.	-.193 ***	1.93 ***	1.20 ***	1.39 ***		
		親同友	-.78 *	-.115 ***	-.07 n.s.	-.07 n.s.	-.29 n.s.		.32 n.s.	-.120 ***	.74 *	-.74 *	.20 n.s.		
		親異友	-.42 n.s.	-.79 *	.29 n.s.	.36 n.s.	-.36 n.s.		.13 n.s.	-.139 ***	.54 n.s.	-.20 n.s.	.20 n.s.		
	血縁的自己	Me	2.75	2.38	2.56	2.50	2.28	n.s.	3.08	2.41	3.19	2.81	2.60	**	
		SD	(1.10)	(1.19)	(1.02)	(1.23)	(1.15)		(1.14)	(1.24)	(1.12)	(1.24)	(1.08)		
家族	開示対象 (J)	母	.38 n.s.	-.38 n.s.	.20 n.s.	-.25 n.s.	-.48 n.s.		.67 n.s.	-.67 n.s.	.11 n.s.	-.27 n.s.	-.48 n.s.		
		父	.20 n.s.	-.18 n.s.	.18 n.s.	.12 n.s.	-.10 n.s.		-.11 n.s.	-.78 *	.78 *	.41 n.s.	.20 n.s.		
		親同友	.25 n.s.	-.12 n.s.	.05 n.s.	-.05 n.s.	-.28 n.s.		.27 n.s.	-.41 n.s.	.38 n.s.	-.38 n.s.	-.59 n.s.		
		親異友	.48 n.s.	-.10 n.s.	.28 n.s.	.23 n.s.	-.23 n.s.		.48 n.s.	-.20 n.s.	.59 n.s.	.21 n.s.	-.21 n.s.		
	実存的自己	Me	2.07	1.74	2.85	2.64	2.23	***	2.07	1.46	2.91	2.55	2.40	***	
		SD	(.99)	(.95)	(1.22)	(1.30)	(1.20)		(1.07)	(.77)	(1.33)	(1.27)	(1.11)		
	開示対象 (J)	母	.34 n.s.	-.34 n.s.	.78 n.s.	.57 n.s.	.15 n.s.		.62 n.s.	-.62 n.s.	.83 **	.47 n.s.	.33 n.s.		
		父	-.78 n.s.	-.112 ***	1.12 ***	.90 ***	.49 n.s.		-.83 ***	-.145 ***	1.45 ***	1.09 ***	.95 **		
		親同友	-.57 n.s.	-.90 ***	.21 n.s.	-.21 n.s.	-.63 n.s.		-.47 n.s.	-.109 ***	.36 n.s.	-.36 n.s.	-.51 n.s.		
		親異友	-.15 n.s.	-.49 n.s.	.63 n.s.	.42 n.s.	-.42 n.s.		-.33 n.s.	-.95 ***	.51 n.s.	.15 n.s.	.15 n.s.		

※母…母親，父…父親，親同友…親しい同性の友人

親異友…親しい異性の友人，友…一般的な友人

※多重比較はBonferroniを用いており，数字は平均の差(I-J)である

※* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

うが高い値であった ($t_{(400)}=2.34, p<.05$)。第4因子『家族』の下位因子である『血縁的自己』も，女性のほうが高い値を示した ($t_{(400)}=2.85, p<.01$)。

10の下位因子のうち5つに有意な差がみられた。3つは女性の開示量が男性と比較して高い値を示した。しかし残りの2つでは男性のほうが女性より高い値であった。これまでの研究では女性のほうが男性より自己開示量が多いとされてきたが，本研究では結果が一部異なり，下位因子によっては男性の自

己開示量が多かった。

開示対象者による自己開示の相違 開示対象者による，自己開示の違いについて検討した。その結果，いくつかの下位因子で差がみられた。

男性の自己開示では Bonferroni の多重比較の結果，第1因子『恋愛・友人』の下位因子『同性関係』では，両親に対する開示と親しい同性・異性の友人や一般的な友人に対する開示には差があり，親より友人へ多く開示していた (Table 6)。『性的側面』に

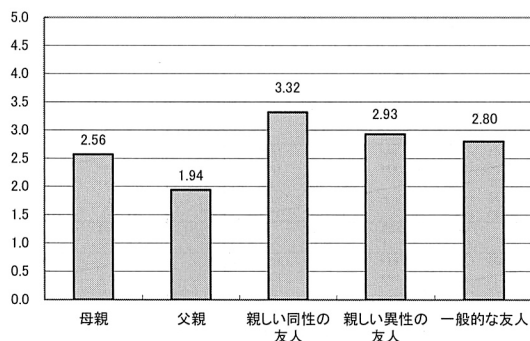


Figure 1 自己開示の開示対象による差 (全体)

関する開示でも同様に、両親より友人に対して多く開示していた。『異性関係』についても、同様の結果であった。第2因子『趣味・関心事』の下位因子『パーソナリティ』では、両親と親しい同性・異性の友人への開示を比較すると、親しい同性・異性の友人が高い値であった。一般的な友人への開示は他の対象者と差がなかった。第3因子『身体』の下位因子『機能的自己』では、父親より親しい同性の友人に多く開示していた。『外見的自己』では、父親への開示と親しい同性・異性の友人、一般的な友人への開示を比較すると、親しい同性・異性の友人のほうが高い値であった。また母親より、親しい異性の友人のほうが高い値であった。第4因子『家族』の下位因子『実存的自己』でも、父親と比較すると親しい同性・異性の友人に対し多く開示していた。第3因子と第4因子の下位因子では、母親はいずれの開示対象者とも差がみられなかった。第2因子『趣味・関心事』の下位因子である『将来展望』と『意見』、第4因子『家族』の下位因子である『血縁的自己』では開示対象者による差がみられなかった。

女性では、すべての下位因子で開示対象者による自己開示の差がみられた (Table 6)。第1因子『恋愛・友人』の下位因子である『同性関係』に関しては、父親に対して最も少なく、親しい同性の友人に対して最も多く開示していた。『性的側面』については、両親より親しい同性・異性・一般的な友人に対して多く開示していた。特に親しい同性の友人に対しての開示は最も高い値を示した。『異性関係』に関しては、『同性関係』と同様に、父親に対して最も少なく、親しい同性の友人に対して最も多く開示していた。第2因子『趣味・関心事』の下位尺度である『パーソナリティ』に関しては、父親に対して最も

少なく開示していた。『将来展望』では、父親への開示と比較して、母親と親しい同性・異性の友人への開示が多かった。『意見』に関しては、父親より親しい同性の友人へ多く開示していた。第3因子『身体』の下位尺度『機能的自己』についても、父親に対しての自己開示が最も低い値であった。また、親しい異性・一般的な友人よりも母親に多く開示していた。『外見的自己』に関しては、父親に対して最も少ない開示をしていた。第4因子『家族』の下位因子である『血縁的自己』に関しては、父親より親しい同性の友人に対して多く開示していた。『実存的自己』は、父親と親しい同性・異性・一般的な友人への開示を比較すると、父親に対しては少ない開示量であった。

男性と女性いずれにおいても多くの開示対象者間で有意な差がみられた。全体を通して両親よりも友人、特に親しい同性の友人に対して多く開示していた。また両親のうち、特に父親に対しての開示量が少なかった (Figure 1)。

自己開示と健康なパーソナリティの関係 まず本研究で用いた質問紙の妥当性と信頼性の検討をした。GHQを元に作成した、健康なパーソナリティを測定する質問紙を因子分析したところ、GHQとほぼ同じ4因子構造が抽出された。ここから本研究で用いた質問は、健康なパーソナリティの調査として妥当であったと考えられた (Table 7)。また、各因子の α 係数を検討したところ、それぞれ、.90, .85, .85, .80であった。このように α 係数も高かったことから、信頼性も十分であったと考えられる。

つづけて因子名の検討を行った。松原 (2008) と同じ因子構造だったため、先行研究にならい、第1

Table 7 健康なパーソナリティの因子分析結果

GHQの要素		うつ傾向	身体的 症状	不安と 不眠	社会的 活動障害	α
25 この世から消えてしまいたいと考えたことは、全くなかった	[うつ傾向]	.91	.03	-.03	-.04	
27 死んだほうがましだと考えたことは全くなかった	[うつ傾向]	.90	.15	-.13	-.09	
24 生きていることに意味がないと感じたことは全くなかった	[うつ傾向]	.73	-.13	.12	.16	
28 自殺しようと考えたことは全くなかった	[うつ傾向]	.69	.01	-.12	.05	
26 ノイローゼ気味で何もすることができないと考えたことは全くなかった	[うつ傾向]	.68	.09	.15	-.01	
23 人生に全く望みを失ったと感じたことは全くなかった	[うつ傾向]	.65	-.05	.16	.03	.90
05 頭痛は全くしなかった	[身体的症状]	-.01	.76	.06	.01	
06 頭が重いように感じたことは全くなかった	[身体的症状]	-.02	.76	.08	-.01	
07 からだがほてったり寒気がしたことは全くなかった	[身体的症状]	-.04	.68	.07	.16	
04 病気だと感じたことは全くなかった	[身体的症状]	.00	.66	-.13	.03	
02 疲労回復剤（ドリンク・ビタミン剤）を飲みたいと思ったことは、全くなかった	[身体的症状]	.13	.61	-.12	.01	
03 元氣なく疲れを感じたことは全くなかった	[身体的症状]	-.13	.58	.28	-.03	
01 気分や健康状態はよかった	[身体的症状]	.05	.53	.00	.26	
09 夜中に目を覚ますことは全くなかった	[不安と不眠]	.24	.51	-.13	-.05	
						.85
22 不安を感じ緊張したことが全くなかった	[不安と不眠]	.05	-.20	.83	.03	
20 いつもよりいろいろなことを重荷と感じたことは、全くなかった	[不安と不眠]	.00	.06	.75	-.01	
18 いらいらして、怒りっぽくなることは、全くなかった	[不安と不眠]	-.11	.12	.72	-.01	
16 ストレスを感じたことが、全くなかった	[不安と不眠]	-.22	.14	.69	.12	
21 自分は役に立たない人間だと考えたことは全くなかった	[うつ傾向]	.30	-.07	.61	-.12	
19 たいした理由がないのに、何かがこわくなったりとりみだすことは全くなかった	[不安と不眠]	.20	.00	.56	-.07	
						.85
14 いつもより自分のしていることに生きがいを感じる事があった	[社会的活動障害]	-.03	-.11	-.13	.84	
15 いつもより容易に物ごとを決めることができた	[社会的活動障害]	-.06	.18	-.11	.72	
13 毎日している仕事は非常にうまくいった	[社会的活動障害]	.05	-.13	.14	.64	
17 いつもより日常生活を楽しく送ることができた	[社会的活動障害]	.15	.11	.15	.52	
12 いつもよりすべてがうまくいっていると感じることがたびたびあった	[社会的活動障害]	-.04	-.01	.12	.49	
						.80
因子相関行列			.16	.40	.34	
				.48	.31	
					.52	

因子を『うつ傾向』、第2因子を『身体的症状』、第3因子を『不安』、第4因子を『社会的活動障害』とした。第1因子『うつ傾向』は「この世から消えてしまいたいと考えたことは、全くなかった」「死んだほうがましだと考えたことは全くなかった」といった質問項目で構成されていた。第2因子『身体的症状』は、「頭痛は全くしなかった」「病気だと感じたことは全くなかった」など、第3因子『不安』は「いつもよりいろいろなことを重荷だと感じたことは、全くなかった」「いらいらして、怒りっぽくなることは、全くなかった」など、第4因子『社会的活動障害』は「いつもより自分のしていることに生きがい

を感じる事があった」「いつもより容易に物ごとを決めることができた」などで構成されていた。因子の得点は、ESDQ-45と同様に平均値を用いた。なお、質問文の内容と因子名が逆転しており解釈が難解なため、今回の研究では値を逆転させ、因子名に合わせた値を用いて分析を行った。たとえば『うつ傾向』は、値が高いほどその傾向が強い。

次に、自己開示の下位因子と、健康なパーソナリティとの相関を検討した。開示対象者ごとの自己開示下位因子と、健康なパーソナリティの相関分析をしたところ、いくつかの有意な相関がみられた(Table 8)。この結果には性差と開示対象者による差

Table 8 自己開示と健康なパーソナリティーの相関

			健康なパーソナリティー			
			うつ傾向△	身体的症状△	不安△	社会的活動障害△
自己開示	父	同性関係 性的側面父 異性関係 パーソナリティー				-.42* -.37* -.39* -.33*
		母 実存的自己			.42*	
	男	親同友 同性関係	-.56***			-.46**
		異性関係 将来展望	-.51** -.36**			-.35*
	女	親異友 同性関係				-.38*
		友 意見 血縁的自己	.34* .36*			
	父	外見的側面		.30*		
		母 意見 機能的側面 血縁的自己		.30* .37*	.34*	
	親同友	同性関係 性的側面 機能的側面	.37*		.33* .34* .36*	.45**
		実存的自己		.42*		.45**
	親異友	同性関係 性的側面 実存的自己		.34* .38* .44**	.37*	
		友 パーソナリティー 将来展望 意見 血縁的自己		-.38* -.47* -.34* -.33*		-.40**

※母…母親，父…父親，親同友…親しい同性の友人，親異友…親しい異性の友人，友…一般的な友人

※有意な結果のみを表示した (* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$)

がみられた。男性の有意な相関は，自己開示と『うつ傾向』『社会的活動障害』に多くみられた。父親と親しい同性・一性の友人に対する自己開示は負の相関であった。つまり，自己開示の多さと『うつ傾向』などの低さに相関がみられた。一方，母親と一般的な友人に対する自己開示では，正の相関がみられた。つまり，自己開示と『うつ傾向』などの高さに相関がみられた。女性においては，男性と比較し，多くの相関がみられた。特に『身体的症状』と『不安』で有意な相関が多かった。父親，母親，親しい同性・異性の友人に対する自己開示とは正の相関がみられた。つまり，自己開示の多さと『身体的症状』などの高さに相関がみられた。一方，一般的な友人に対する開示の場合は，負の相関がみられた。つま

り，自己開示と『身体的症状』などの低さに相関がみられた。性差はなく，一般的な友人に対する開示と健康なパーソナリティーは，他への開示との関係と逆の相関をする傾向がうかがえた。これらの結果は，松原(2008)がESDQ-45の4因子と健康なパーソナリティーとの相関を検討した結果と，おおむね一致した。

考 察

本研究では，榎本(1987)が作成した自己開示質問紙 ESDQ-45 の因子構造を再検討することが，目的のひとつであった。松原(2008)と本研究の分析で抽出された4因子『恋愛・友人』『趣味・関心ごと』『身体』『家族』の各因子内で，さらに因子分析

を行った結果，第1因子『恋愛・友人』と第4因子の下位因子『家族』は，榎本の作成した15側面とおおむね合致する構造となった。しかし，第2因子『趣味・関心ごと』では，構造に違いがみられた。特に第1下位因子と第2下位因子は大きく変わったため，それぞれを『パーソナリティ』因子，『将来展望』因子とした。また，第3因子『身体』の第1下位因子も，榎本の側面とは若干異なった構造となった。そのため前述のとおり『機能的側面』因子とした。第2下位因子はESDQ-45の側面と同じだったため，『外見的自己』とした。

ESDQ-45では15の側面に分類されていたが，本研究では10の因子が抽出された。そのため“物質的自己”の下位側面である“知的側面”“情緒的側面”“志向的側面”，“社会的自己”の下位側面である“公的役割関係の側面”と“物質的自己”“意見”“うわさ話”が削除された。ESDQ-45と似た内容で構成されており，因子分析をした後，側面名を因子名として採用したものは『同性関係』『性的側面』『異性関係』『意見』『外見的側面』『血縁的自己』『実存的自己』であった。その他，側面名を参考に命名したのが『機能的側面』であった。複数の側面が混在したため，新たに因子名を検討したのは『パーソナリティ』『将来展望』の2つであった。15側面から10因子へと数が減少したため，削除された側面が7つあった。しかし残された8側面のうち7つはそのまま因子名として採用された。

次に第2の本研究の目的であった，自己開示の性差だが，10の下位因子のうち5つで有意な差がみられた。差がみられたもののうち，『同性関係』『外見的自己』『血縁的自己』は女性のほうが多く開示しており，『性的側面』『意見』については男性のほうが多く開示していた。自己開示の内容により，性差がみられた。女性は男性と比較し，自己開示量が多いというこれまでの研究とは一部異なった結果となった。性差の理由について，Derlegaら(1993)は性役割による自己開示の抑制を指摘していた。彼は男性の自己開示の少なさについてのみ言及していたが，女性の方が少なく開示していた『性的側面』や『意見』も同様の理由があるのではないかと推測される。

第3の目的であった開示対象者による自己開示量の違いは，顕著な差がみられ，仮説は支持された

といえる。全体をとおして，男性と女性いずれにおいても，両親よりも友人への開示量が多かった。特に親しい同性の友人に対する開示が多く，父親に対する開示が少なかった。これは，榎本(1982)やBurnard & Morrison (1992)と同じ結果であった。調査対象が青年期にあたる大学生だったのが，両親より友人への自己開示が多かった理由のひとつとして考えられる。

最後に自己開示と健康なパーソナリティの関係は，男性では自己開示量と『うつ傾向』と『社会的活動障害』で有意な相関が多くみられ，女性では自己開示量と『身体的症状』と『不安』で有意な相関が多くみられた。そして，男性では父親，親しい同性の友人，親しい異性の友人に対する自己開示と，『うつ傾向』などの因子の低さに相関があった。一方，母親と一般的な友人に対する自己開示では逆の相関がみられ，『うつ傾向』などの高さと相関があった。女性においては，父親，母親，親しい同性の友人，親しい異性の友人に対する自己開示量の多さと『身体的症状』などの因子の高さに相関がみられた。一方，一般的な友人に対する自己開示では逆の相関がみられ，因子の低さと相関がみられた。男性の父親，親しい同性・異性の友人に対する開示と，女性の一般的な友人に対する開示では，先行研究(丸山・今川，2001, 2002; 東・榎本，2006; 小野寺・河村，2007; 高木，2007)と同じ結果であったが，男性の母親と一般的な友人に対する開示と，女性の母親，父親，親しい同性・異性の友人に対する開示では，逆の結果が得られた。ここから，開示対象者により，自己開示と健康なパーソナリティの関係は異なることが考えられた。これについては，今後よりいっそうの研究が必要だろう。

また，本研究では因果関係については検討しなかった。女性では自己開示量と『身体的症状』などの間に正の相関が多くみられたが，自己開示が多いとパーソナリティが健康でない傾向がみられるのか，パーソナリティが健康でない傾向があると自己開示量が多いのかは不明である。本研究の結果を考察するに，女性はストレス解消法として家族や友人と語らうことが男性よりも多い，という調査結果(朝日新聞，2008, 7. 26.)を参考にすると，パーソナリティの状態を原因として，自己開示という行動が起こると考えることもできる。しかし，この点に

については今後の検討課題としたい。今後、自己開示と健康なパーソナリティーの因果関係について、さらなる検討が必要だろう。

引用文献

- Burnard, P. & Morrison, P. 1992 *Self-Disclosure: A Contemporary Analysis*. Newcastle upon Tyne: Athenaeum Press Ltd.
- Cozby, C. F. 1973 Self-disclosure: A literature review. *Psychological Bulletin*, **79**, 73-91.
- ダーレガ, V. J. ・メッツ, S. ・ペトロニオ, S. ・マーグリス, S. T.; 齊藤 勇 (監訳) 1999 人が心を開くとき・閉ざすとき—自己開示の心理学 金子書房. (Derlega, V. J., Metts, S., Petronio, S., & Margulis, S. T. 1993 *Self-Disclosure*. United States, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.)
- 榎本博明 1982 青年期における自己開示性(1) 日本心理学会第46回大会発表論文集, 229.
- 榎本博明 1987 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について 心理学研究, **58**(2), 91-97.
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究第1版 北大路書房.
- 福岡欣治 2006 日常ストレス経験の友人への自己開示とソーシャル・サポートが気分状態に及ぼす効果: 予備的検討 静岡文化芸術大学研究紀要, **6**, 43-47.
- 飯長喜一郎 1978 グループ合宿における自己開放性 東京大学教育学部紀要, **17**, 77-84.
- 東 奈々子・榎本博明 2006 自己開示および自己呈示とふれあい恐怖の関係 日本パーソナリティー心理学会第15回大会発表論文集, 108-109.
- ジェームス, W. 今田 恵 (訳) 1956 心理学 (上下岩波書店. (James, W. 1892 *Psychology: Briefer course*. New York: Holt.)
- ジュラード, S. M.; 岡堂哲雄 (訳) 1974 透明なる自己 第2版 誠信書房 (Jourard, S. M. 1971 *The Transparent self*. New York: D. Van Nostrand.)
- Jourard, S. M. 1980 *Healthy personality*. New York: Macmillan Publishing Co., Inc.
- Jourard, S. M. & Lasacow, P. 1958 Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, **56**, 91-98.
- Jourard, L. 1994 *Sidney M. Jourard: SELECTED WRITINGS*. California: Round Right Press.
- 梶田毅一 1980 自己意識の心理学 第1版 東京大学出版会.
- 北村晴朗 1962 自我の心理 第1版 誠信書房.
- 熊野道子 2002 自ら進んで自己開示する場合と尋ねられて自己開示する場合との相違 教育心理学研究, **50**, 456-464.
- 丸山利弥・今川民雄 2001 対人関係の悩みについての自己開示がストレス低減に及ぼす影響 対人心理学研究, **1**, 107-118.
- 丸山利弥・今川民雄 2002 自己開示によるストレス反応低減効果の検討 対人社会心理学研究, **2**, 83-91.
- 松原詩緒 2008 自己開示と精神の健康に関する研究 立正大学大学院心理学研究科研究紀要, **3**, 29-39.
- Mayo, P. R. 1968 Self-disclosure and neurosis. *British Journal of Social & Clinical Psychology*, **7**, 140-148.
- 森脇愛子・坂本真士・丹野義彦 2002a 大学生における自己開示方法および被開示者の反応の尺度作成の試み 性格心理学研究, **11**(1), 12-23.
- 森脇愛子・坂本真士・丹野義彦 2002b 大学生における自己開示の適切性, 聞き手の反応の受容性が開示者の抑うつ反応に及ぼす影響—モデルの縦断的検討— カウンセリング研究, **35**, 229-236.
- 小野寺正己・河村茂雄 2007 ソーシャル・スキルを伴った学級内での自己開示が学級への適応感に及ぼす影響の検討 日本教育心理学会総会発表論文集, **49**, 352.
- Pederson, D. M.; & Higbee, K. L. 1969 Personality correlates of self-disclosure. *Journal of Social Psychology*, **78**, 81-89.
- Pennebaker, J. W., Keicolt-Glaser, J. K., & Glaser, R. 1988 Disclosure of traumas and immune function: Health implications for psychology. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **56**, (2), 239-245.
- 高木浩人 2007 大学生の自己開示と孤独感の関係: 開示者の性別, 開示相手, 開示側面の検討 愛知学院大学論叢 心身科学部紀要, **2**, 53-59.
- ヴァン・デン・ベルグ, J. H.; 早坂泰次郎 (訳) 1980 引き裂かれた人間・引き裂く社会 第1版 勁草書房. (van den Verg, J. H. 1963 *Divided existence and complex society: An historical approach*. New York: Humanities Press.)
- 和田 実 1995 青年の自己開示と心理的幸福感の関係 社会心理学研究, **11**, 11-17.
- Ward, M., Doherty, D. T., & Moran, R. 2007 *It's good to talk: Distress disclosure and psychological well-being*. Dublin, Ireland: Health Research Board.

(受稿: 2008. 8. 18, 受理: 2009. 3. 16)